支援コーディネーターを活用した
子どもたちみんなが『楽しく学びあう・わかる・できる』授業づくり

交野市立郡津小学校　　小川　佐希子

１、はじめに

ユニバーサルデザイン化された授業の推奨を最近よく耳にする。本校でも、インクルーシブ教育による、授業のユニバーサルデザイン化に取り組もうとしている。

校内で、ユニバーサルデザイン化の取り組みの紹介を数多くしてきた成果もあり、教室内の環境づくりは少しずつ進んできている。また、教員内での理解も深まりつつあり、学年の実態に応じてどんな環境調整が考えられるか、話し合う場面も見られる。

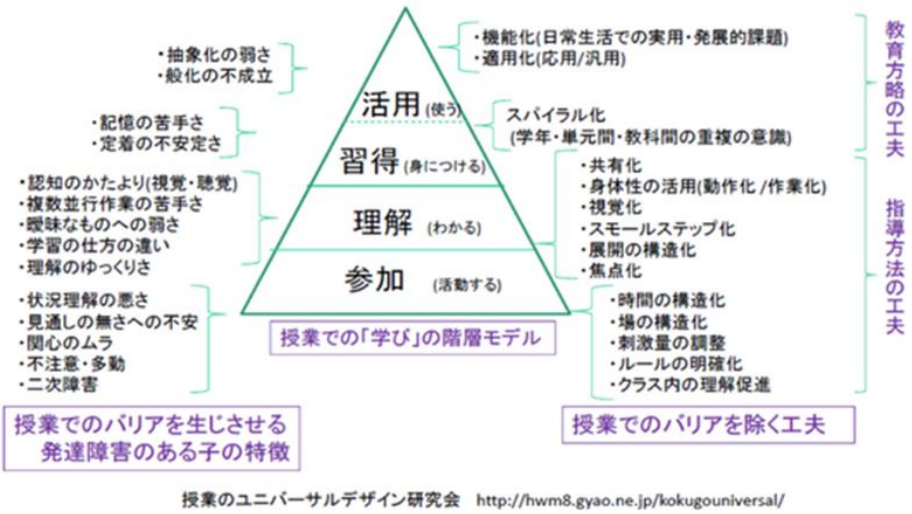
しかし、支援学級在籍の児童が通常学級の中で学習する中で、どのように学習を進めていけばよいのか、戸惑う声も見られる

私は、2012・2013 年に支援学級を担任し、その後音楽専科、通常学級担任を経て、昨年度より再び支援学級担任をしている。音楽専科や通常学級担任の時には、支援学級担任の時に知り得た知識等を生かした授業をすることもできた。今回は、その時のことも踏まえ、通常学級で支援の必要な児童が学習を進めていくために、どのような授業を考えていったらよいのか、何が必要なのか、事例とともに考察する。

２、授業におけるユニバーサルデザインとは

日本授業ＵＤ学会代表の桂は授業ユニバーサルデザインの定義を「特別な支援が必要な子を含めて、通常学級の全員の子が、楽しく学び合い『わかる・できる』ことを目指す授業デザイン」としている（参考１）。

では、授業をユニバーサルデザイン化するにあたり、どのような視点が必要なのか、小貫は以下の図を提示している。



授業のＵＤ化モデル（小貫・桂　２０１４）

このモデルは、下部に置かれたものであればあるほど、上部の視点を支える要素となっている。そして、どの視点も子どもが授業中に「考える」ことができるためのサポート機能であり、「考える」ことができる授業を目指すことが授業のＵＤ化そのものであるとしている。（参考２）

そのためには、もちろん子どもの特徴や特性を把握しておくことが大切であり、それを考慮に入れ授業を工夫することが求められる。

安部はＵＤ化された授業の５つのテクニックとして、「ひきつける」「むすびつける」「方向づける」「そろえる」「わかった、できた、と実感させる」ことを挙げ、これらを一時間の授業に取り入れた授業の基本の型を提案している。（参考３）

	５つの観点	手だて
導入	☆ひきつける ☆方向づける ☆むすびつける	〈視覚刺激で意欲を高める〉 視覚化：本時への学習意欲を高め、ひきつける 焦点化：本時のゴールの明示、方向づける 共有化:本時の学習内容と子どもをむすびつける
展開	☆ひきつける ☆そろえる ☆方向づける ☆むすびつける	〈視覚刺激を言語活動で広げ、論理を追究する〉 視覚化：考える材料を提示し、ひきつける 共有化：思考過程をそろえる 「〇〇さんの言っていることがわかる？」 焦点化：考えるポイントを明確にし、方向づける 共有化：モデル発信・ペア・グループトークで理解をそろえる・むすびつける
終末	☆そろえる ☆むすびつける ☆わかった、できた	〈つかんだことを表現する〉 「わかった」を共有化、視覚化することで「できた」へ モデルの提示、型の提示 生活へ共有化しむすびつける、次の時間への意欲とむすびつける

授業をＵＤ化するための５つのテクニック　（日本授業ＵＤ学会湘南支部・作成）

表のような基本型はどの教科、どの発達段階の授業でもあてはまりやすい「授業の型」であるとしている。視覚化、焦点化、共有化の３点を意識しながら１時間の授業を組み立てていくことが必要であるということがわかる。

安部の授業の５つのテクニックは、小貫のモデル図でいう「理解」階層に当てはまるのであろう。では、次の階層へ進んでいくにはどうしたらよいのか。「わかった」「できた」で終わらずに、授業の終末にある「生活へ共有化しむすびつける」ことが、「習得」「活用」階層へ子どもがすすんでいくステップになり得るのではないかと考える。

以上のことから、授業のユニバーサルデザイン化をすすめるにあたっては、「子どもの特性の把握」と「各階層をつなぐ視点を意識した工夫」の二点が必要であると考えた。

３、授業事例の分析

（１）事例紹介

題材名　・・・音楽に思いをこめて

題材の目標・・・音楽を形づくる要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解する。
楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを表現する。

主教材　・・・交響組曲「シェエラザード」より「海とシンドバッド」

ａ：児童の実態

対象学年の子どもたちは、語彙が乏しく、文章や言葉では自分の思いを表現しきれない子も見られ、音楽は好きだが上手く表現することができないようだった。また、学年の中には、私が支援担任として関わった支援学級在籍児童もおり、その子たちも同じように、音楽は好きだが、上手く表現できず、授業中に評価に結びつく活動を行うことが難しいこともあった。

ｂ：授業の内容、児童の様子

本授業では、『曲の構造や感じたことを色々な表現方法で、表してみよう』ということで、図形譜を作成させたところ、どの子も曲を何度も聴く中でめあてをよく理解し、「音楽って図工みたいなこともするんやなあ。楽しい。」と、ウキウキしながら、グループ内で見せ合いっこをしながら、どんどん作成を進めていく様子が見られた。リコーダーや歌の表現には、音程や音階など正確さを要求される場面があるが、この授業の「失敗がない」、「自分の思ったように表現してよい」というめあてが、より積極的に授業に取り組む子どもたちの意欲につながっているようだった。

Ａは、手先が器用だったため、Ａが選ぶのではないかと考えて、図形作成には当初含めていなかった折り紙も用意した。結果的には彼だけでなく、クラスのほとんどの子どもが折り紙を選び、「描いても、切っても、破ってもよし」とした活動で「描く」を選んだ子は数人だった。

Ａは、短調の場面を作成していたが、普段の製作場面では選ばない暗い色を選び、強い音をとげとげで表し、低い音を下の方に配置して表現していた。迷いなく作成していく姿に、普段は支えられたり、みんなの様子を見てから行動することが多い彼を知っているクラスの友だちは大変驚き、自分の図形を作る参考にしている子もいた。

児童の作成した図形譜

ｃ：児童の感想、評価

この後、ポップを作って曲紹介をする授業も行った。図形・絵画・文章・・・といった様々な表現活動を経験した後、言語活動が不得意な児童は図形のほうがよい、という意見を出し、図や色などで表現することが苦手な児童は、文章のほうがよい、と意見を出していた。中には、絵を描くことも文章を書くことも苦手なので、鑑賞の授業はいつも嫌だったが、切って貼るだけだから図形はよかった、と意見を出してくれた児童もいた。

子どもたちは特性や学習進度にかかわらず、自分が鑑賞したものをどう捉えたのか、それぞれ自分にあった表現方法を見つけることができた。めあてを「色々な表現方法を使って表現する」として「表現」できているかどうか、ということに焦点を当てたために、言語表現で十分に力を発揮できない児童の評価を、客観的に行うことができた。

（２）５つの観点から分析

	学習活動	観点
導入	１、鑑賞曲を聴く。	ひきつける
	２、曲を分割し、それぞれの構造を作るものを書き出す。	方向づける、むすびつける
展開	１、参考図形譜を提示する。	ひきつける
	２、参考図形譜を見ながら、何を表しているか全員で意見交換する。	そろえる
	３、班の中で曲の担当部分を決める。	方向づける
	４、作成	そろえる、むすびつける
終末	１、班で一曲をつなぎ、全員で曲を聴きながら意見交換をする。	わかった、できた そろえる
	２、音楽には形づくる要素が含まれていることを意識しながら表現することを理解し、次時の歌唱につなげていく。	むすびつける

一時間の授業のなかで、５つの観点が入っていることから、本授業はある程度ユニバーサルデザイン化された授業だったといえよう。しかし、授業を振り返ると展開中の「方向づける」観点が弱かったと思う。グループ内で、図形譜の作成にあたり、例えば低音を表すにはこういう表現、強弱を表すにはこういう表現をする、というある一定のルールを決めておけば、さらに理解が深まり、終末の「生活へむすびつける」や、次時へのより一層深いつながりができた可能性がある。そのため、この授業を通して、全児童が「習得」段階へと進めたかどうかは、疑問が残る。

私が、本授業で一番気をつけたことは、めあての「方向づけ（焦点化）」であった。支援学級担任を経験した中で、毎時間のめあてがぼやけてしまったり、多すぎたりすると子ども

が何を学んだのか、よく分からないまま時間が過ぎてしまう、ということがあった。全ての活動の中の個々のめあてのどこに終着させるために行っているのか、ということをよく考えながら授業を組み立てることの大切さを学んだおかげだ。

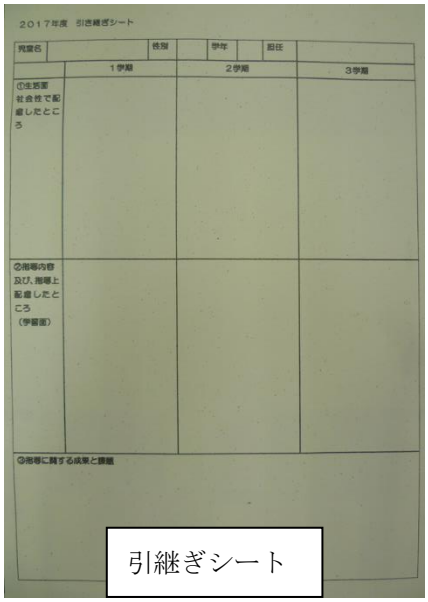
本授業において、積極的に活動し次の段階へ進もうとする子どもの姿勢が見られた要因は、このめあての焦点化の重視にあったと考えられる。どのアプローチ方法でもよいから、「わかった、できた」という所へつなげていくためには、全員が同じ学習スタイルではないことを理解すること（子どもの特性の理解）、まためあてのぶれない様々な学習アプローチを提供するための教材研究（階層をつなぐ視点）がすごく大切なのだということを実感した。

４、個々の支援方法を理解するために

個々の学習スタイルを理解すること、またユニバーサルデザイン化するための教材研究をどのようにすすめていったらよいか、手立てを考える。

（１）子どもの特性を理解するために

前年度、私が支援担として関わっていたため、それぞれの児童の特性を充分に理解できており、特性に応じた授業を考え、充分な評価ができたと考えている。では、通常学級や教科担任として初めて子どもと関わることになった場合、特性を把握し、実態に合わせた授業を早くから展開するためには、どのような手立てが考えられるだろうか。私は、個別の支援シートの活用を提案したい。



引継ぎシート

本校では、個別の支援シートを実態交流会等で全職員が見る機会を設け、子どもたちの個々の目標や実態などを知らせている。また、支援学級には在籍しないが、配慮を要する児童のために、独自に支援シートを作っている。

この支援シートは、単年度では終わらず、次年度の担任が引き継いで書きこんでいき、卒業時まで使用することになっている。記入内容については、幅をもたせており、多岐に渡って記入することができる。実態だけでなく、例えば学習面のどのような点が苦手で、そのために課題をどのように出したか、など次年度の担任が新年度よりすぐ指導に当たれるような内容となっている。各担任は、学期末や気がついたときにいつでも書き込むことができ、指導を振り返ることも可能だ。また、新たに配慮を要する児童について、シートを年度途中から作成することもでき、一人の児童を一年という横の視点だけでなく、卒業まで見据えた縦の視点からも見つめることができる。

単元内容を組み立てる前に、これらを活用し、どんなアプローチ方法をとれば、学習のめあてを子どもが掴み取ることができるのか、年度の早い段階から取り組むことができると考えられる。また、担任よりも子どもと会う機会の少ない教科担任にとっては、大事な情報源

となり得る。

（２）支援コーディネーターの活用

小学校では、担任が多くの科目を教える。それゆえ、全ての教科について専門的になる、ということは大変難しい。だが、ユニバーサルデザイン化していくにあたり、縦の系列を意識した指導というのは、毎時間のめあての焦点化を考えたとき、とても重要になってくるはずだ。それには、教科ごとの専門性を教師が高める必要がある。だが、一人ひとりがそうしていくことは、時間的に無理であろう。私は、支援コーディネーターの活用を考えたい。

本校では、研究部が中心となり、各教科ごとに焦点化したカリキュラムを作成している。それは、教科にとどまらず、障がい理解教育についても作成していっている。使用した教材や教具、ワークシートなどを引継ぎ、指導を振り返り日々の指導に生かしている。

支援教育の視点をもつ支援コーディネーターならば、授業のユニバーサルデザイン化を進めていくためにそのカリキュラムを活用しながら、実践方法を授業者とともに一緒に考えることが可能だろう。また、各教科ごとの様々な実践方法を紹介し、校内に広めていく活動も必要だ。実践後は、それぞれの実践を支援コーディネーターが集め、それを更に縦の系列に変え、また見直しを研究部とともに図り、経年計画で考えていくことも出来るだろう。

５、今後の展望

本校では、個別の支援シートを見る機会を設けてはいるが、支援シートを見る機会はまだまだ少ない。これらの活用を更に進めていくことが今後必要になるだろう。また、支援コーディネーターが中心となった授業づくりは本校では始まったばかりである。

今後、教科ごとの実践を紹介したり、学年ごとにできる実践を考えたりする場を設定し、ユニバーサルデザイン化の視点を取り入れた授業展開を校内でまとめて、全員の子が、楽しく学びあい『わかる・できる』授業づくりに取り組んでいきたい。

６、参考文献

（１）日本ＵＤ学会ＨＰ
（２）『通常学級のユニバーサルデザインと合理的配慮』2016　金子書房
　　Ｐ．34 小貫悟　（2016）「どの子も学びやすい授業作りのために」
（３）『通常学級のユニバーサルデザインと合理的配慮』2016　金子書房
　　Ｐ．２　安部利彦「通常学級でユニバーサルデザインを進めるために
　　～研究校から学ぶ」